

平成 21 年 6 月 22 日現在

研究種目：基盤研究(A)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18202005  
 研究課題名（和文） 環タイ湾地域におけるインド系文化の変容に関する基礎的研究  
 研究課題名（英文） A Fundamental Study on the Transformation of The Indian Culture along the Gulf of Thailand  
 研究代表者  
 肥塚 隆 (KOEZUKA TAKASHI)  
 大阪人間科学大学・人間科学部・学長  
 研究者番号：90027988

研究成果の概要：東南アジアの遺跡や博物館等に遺されているヒンドゥー教や仏教の造形芸術資料を渉猟し、それらを過去の王朝、民族、あるいは現在の国ごとに分類して検討するのではなく、東南アジア全体を一まとまりとする歴史体系の中で総合的に位置づけて考察するための基礎資料の集成に努めた。特筆すべき成果としては、分担者の深見純生が東南アジアのモンスーン航海の確立が4世紀前半にさかのぼることを明らかにした点である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	11,400,000	3,420,000	14,820,000
2007年度	10,300,000	3,090,000	13,390,000
2008年度	9,600,000	2,880,000	12,480,000
年度			
年度			
総計	31,300,000	9,390,000	40,690,000

研究分野：南アジア東南アジア美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：東南アジア、南アジア、彫刻史、ヒンドゥー教、仏教

## 1. 研究開始当初の背景

同じ研究代表者による2002～2004年度の基盤研究(A)は、東南アジアの古代国家がインド文化の諸要素を組織的に受容することによって初めて成立したとするセデスの「インド化」の概念を批判的に考察した。そしてその成果の一部として、東南アジアの主要な10博物館が所有する彫刻のカタログを編集した。しかしそこに提示した作品のデータは各博物館提供のそれに従ったため、東南アジア全体を見通した統一性をもつものではなかった。そこで東南アジアのほぼ全体を一まとまりの歴史的地域として取り扱う必要性を痛感し、タイ湾を取り巻く各地域の造形芸術作品を特

定の時期を基準として比較検討する本研究を開始した。

## 2. 研究の目的

東南アジアの古代文化の成立過程の研究は、古くはインドや中国の影響を重視しがちであった。その一方で第二次世界大戦後に独立した東南アジアの多くの国々では、自国の伝統を尊重するあまり、インドや中国の影響のみならず、東南アジアの他地域との関係もまともに検討しないという傾向が強まった。さらに、歴史学、文献学、思想史、考古学といった研究領域ごとの研究が主体であった。そこ

で本研究班では、美術史、建築史、歴史考古学、歴史学、仏教学の多様な研究者が集まり、東南アジア全体を歴史的統一体として取り扱い、東南アジア各地の文化の共通性と独自性とを考察することにした。

### 3. 研究の方法

2か月に1回程度の研究会の開催と、現地調査を活動の中心とした。研究会は3年間で20回開催し、東京国立博物館の特別展の際に開いた関係者のみの意見交換会を除き、大半を一般人にも公開し、毎回2名程度の研究者の発表と質疑応答とした。補助事業者以外に延べ12名の研究者を発表者として招待し、多角的な内容の研究会とした。

現地調査は、2006年夏に南タイ、同冬に南インドのカルナータカ地方、2007年春にジャカルタ、同夏にカンボジア、同冬に西インドのグジャラートとデリー周辺、2008年夏に中部ジャワと東部ジャワで実施し、補助事業者以外に延べ10名の若手研究者に研究協力者として参加してもらった。遺跡や博物館で造形資料を目の前にして、分野を異にする研究者が自由に意見を交換するのは、きわめて意義深いものがあつた。現地の研究者との交流も積極的に行い、2008年秋には National Museum, Bangkok において、タイの研究者を交えてこの研究班の研究成果報告会を開催する準備を進めていたが、政情不安のため実現しなかったのはまことに残念である。

### 4. 研究成果

東南アジアのモンスーン航海の確立はこれまで1世紀頃とされてきたが、すでに述べたように深見純生の研究により、4世紀前半以降に改められることになった。さらに扶南の国家形成はインドの影響ではなく、東南アジア内部の諸関係の結果と見るべきことを明らかにし、セデスの説く「第1次インド化」が存在しなかったことを論証した。今後は教科書の該当事項が書き換えられるなど、その意義はきわめて大きい。

さらに南アジアでの遺跡調査で収集された写真資料を基にして、デカン地方のチャルキヤ時代や、西インドのグジャラート地方の美術と東南アジアの造形芸術との関連が注目されることが期待できる。これまで東南アジアとの関連はパッラヴァ朝やチョーラ朝など南インドのタミル地方のそれが重視されてきたが、新しい視点を提示することが可能となった。これらの写真資料は、大阪大学総合学術博物館のホームページで順次公開される予定である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計26件)

①丸井雅子、「美術・建築史」、東南アジア学会監修『東南アジア史研究の展開』(山川出版社)、223-226、2009年、査読有。

②肥塚隆、「インドの美意識—豊饒と活力への讃歌—」、シルクロード学研究センター(編)『インド世界への憧れ—仏教文化の原郷を求めて』(シルクロード・奈良シンポジウム記録集9)、52-57、2008年、査読無。

③深見純生、「混填と蘇物—扶南国家形成の再検討」、『国際文化論集』(桃山学院大学)、39、7-18、2008年、査読無。

④深見純生、「震災にみるジャワ社会」、『桃山学院大学総合研究所紀要』34-2、91-96、2008年、査読無。

⑤Fukami, Sumio, “Indonesia in 1913: The Social Background to the Deportation of Three Indische Partij Leaders,” Ishii, Yoneo ed., *The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the 19th and 20th Centuries*, Tokyo: Toyo Bunko, 87-113, 2008, 査読有。

⑥小野邦彦、「インドネシア・ジョグジャカルタ遺跡の被災と復興」、『イスラム科学研究』(早稲田大学イスラム科学研究所)、173-178、2008年、査読有。

⑦種市麻衣・花里利一・大和智・小野邦彦・上北恭史・箕輪親宏、「ジャワ島中部地震により被災した世界遺産プランバナン遺跡群—その3部分解体による内部構造と材料調査—」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』、759-760、2008年、査読有。

⑧花里利一・種市麻衣・大和智・上北恭史・箕輪親宏・小野邦彦、「ジャワ島中部地震により被災した世界遺産プランバナン遺跡群—その4基礎地盤および建物の地震時挙動の検討—」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』、761-762、2008年、査読有。

⑨小野邦彦・大和智・花里利一、「ジャワ島中部地震により被災した世界遺産プランバナン遺跡群—その5シヴァ祠堂修復工事四半期報告書およびオランダ領東インド考古局による古写真資料—」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』、763-764、2008年、査読有。

⑩肥塚隆、「ボロブドゥールの善財童子歴参図浮彫について」、『民族藝術』24、25-32、2008年、査読有。

⑪深見純生、「宋元代の海洋東南アジア」、桃木至朗編『海域アジア史研究入門』(岩波書店)、30-39、2008年、査読有。

⑫深見純生、「インドネシアにおける都市化の諸側面—1990年と2000年の50都市の比較から—」、『桃山学院大学総合研究所紀要』、33-1、

169-179、2007年、査読有。

⑬小野邦彦、「過去の修理との関連について」、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター『世界遺産プランバナン遺跡修復協力事業報告』、7-26、2008年、査読有。

⑭Ono, Kunihiko, “Historical Review on Restroration in the Past,” Japan Centre for International Cooperation in Conservation, National Research Institute for Cultural Properties, *Survey Report and Restroration Plan on Prambanan World Heritage Temples*, 9-37, 2008, 査読有。

⑮橋本康子、「インドの伝統服—下衣について」、『大阪人間科学大学紀要』、7、127-135、2008年、査読有。

⑯小野邦彦、「ジャワ島中部地震により被災した世界遺産プランバナン遺跡群—その1 破損状況と修復に向けての課題—」、『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2 分冊』373-374、2007年、査読有。

⑰小野邦彦、「ジャワ島中部地震により被災した世界遺産プランバナン遺跡群—その2 地震応答解析による被害の解釈—」、『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2 分冊』375-376、2007年、査読有。

⑱橋本康子、「インド・グジャラート州カッチ地方のミラーワーク」、『大阪人間科学大学紀要』、6、77-85、2007年、査読無。

⑲肥塚隆、「ヒンドゥー教美術」、山岡、肥塚、曾布川(編)『東洋の美術』(勁草書房)、59-74、2006年、査読無。

⑳肥塚隆、「インドネシアの古代美術」、山岡、肥塚、曾布川(編)『東洋の美術』(勁草書房)、102-120、2006年、査読無。

21 深見純生、「パレンバン再考—1400年の都市」、『東南アジアの都市と都城 II』(東南アジア考古学会研究報告第4号)、57-71、2006年、査読有。

22 深見純生、「ターンブラリングの長い13世紀とコマーシャルブーム」、『国際文化論集』(桃山学院大学)、34、81-97、2006年、査読無。

23 深見純生、「果布(カプル)—『史記』『漢書』に記されたインドネシア語」、『南方文化』、33、191-201、2006年、査読有。

24 Fukami, Sumio, “Tambralinga and the Southeast Asian Commercial Boom,” 『国際文化論集』(桃山学院大学)、35、49-70、2006年、査読無。

25 深見純生、「広州重修天慶観記」、『佛教藝術』、287、74-80、2006年、査読有。

26 小野邦彦、「遺跡の修復履歴について」、『ジャワ島中部地震による世界遺産プランバナン等の被害状況調査報告』(平成18年度独立行政法人文化財研究所文化遺産国際協力コンソーシアム)、17-27、2006年、査読有。

[学会発表](計14件)

①肥塚隆、「中部ジャワのリンテル」、第36回東南アジア彫刻史研究会、2008年10月19日、大阪人間科学大学正雀学舎。

②小野邦彦、「『基壇』と『基台』について—ジャワ島のチャンディ建築の立面構成の類型化とその視的効果—」、第36回東南アジア彫刻史研究会、2008年10月19日、大阪人間科学大学正雀学舎。

③深見純生、「法頭の帰程—海域東南アジアにおけるモンスーン航海確立の時期—」、第34回東南アジア彫刻史研究会、2008年7月19日、大阪人間科学大学正雀学舎。

④丸井雅子、「文化財の保存と公開—アンコール遺跡群バンテアイ・クデイを事例に」、日本考古学協会代74回総会、2008年5月25日、東海大学平塚学舎。

⑤深見純生、「インドネシア考古学写真コレクションについて」、第32回東南アジア彫刻史研究会、2008年5月10日、大阪人間科学大学正雀学舎。

⑥肥塚隆・深見純生・浅湊毅、「グジャラート州の建築彫刻の調査略報」、第29回東南アジア彫刻史研究会、2008年2月16日、大阪人間科学大学正雀学舎。

⑦肥塚隆、「ボロブドゥールの善財童子歴参図—浮彫と台本—」、第28回東南アジア彫刻史研究会、2007年11月25日、大阪人間科学大学正雀学舎。

⑧小野邦彦、「インドネシア文化観光省歴史考古局所蔵の古写真資料について」、第28回東南アジア彫刻史研究会、2007年11月25日、大阪人間科学大学正雀学舎。

⑨深見純生、「今夏のアンコールのプノム・ボクの調査報告」、第27回東南アジア彫刻史研究会、2007年10月21日、大阪人間科学大学正雀学舎。

⑩小野邦彦、「ジャワ島中部地震による世界遺産プランバナン遺跡群などの被害状況調査報告」、第23回東南アジア彫刻史研究会、2007年4月14日、大阪人間科学大学正雀学舎。

⑪Koezuka, Takashi, “The Origin of the Head-dress *Shirashchakra* of the Chola Bronzes, 94th Indian Science Congress, Jan. 3, 2007, Sastri Hall, Annamalai University, Chidambaram, Tamil Nadu, India.

⑫肥塚隆・深見純生・橋本康子・浅湊毅・丸井雅子、「東南アジア史研究の当面の課題」、第21回東南アジア彫刻史研究会、2006年10月29日、大阪人間科学大学正雀学舎。

⑬深見純生、「パレンバンの7~13世紀を捉え直すには」、第20回東南アジア彫刻史研究会、2006年7月8日、大阪人間科学大学正雀学舎。

⑭肥塚隆、「チョーラ時代の建築と彫刻」、第19回東南アジア彫刻史研究会、2006年6月3日、大阪人間科学大学正雀学舎。

〔図書〕(計2件)

①桃木至朗、深見純生、ほか7名監修、平凡社、『新版東南アジアを知る事典』、2008年、729ページ。

②レオナルド・ブリュッセイ著、深見純生・藤田加代子・小池誠訳、晃洋書房、『竜とみつばち—中国海域のオランダ人400年史』、2008年、235ページ。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

肥塚 隆 (KOEZUKA TAKASHI)

大阪人間科学大学・人間科学部・学長

研究者番号：90027988

### (2) 研究分担者

深見 純生 (FUKAMI SUMIO)

桃山学院大学・国際教養学部・教授

研究者番号：40144555

淺湫 毅 (ASANUMA TAKESHI)

京都国立博物館・学芸部・主任研究員

研究者番号：10249914

丸井 雅子 (MARUI MASAKO)

上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90365693

小野 邦彦 (ONO KUNIHICO)

サイバー大学・世界遺産学部・准教授

橋本 康子 (HASHIMOTO YASUKO)

大阪人間科学大学・人間科学部・教授

研究者番号：204112720

### (3) 連携研究者

デュルト ユベール (DURT HUBERT)

国際仏教学大学院大学・仏教学研究科

・教授

研究者番号：20288070

藤岡 穰 (FUJIOKA YUTAKA)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：70314341